

「悲しきこといときまざまなり」も、「やはり山の音だった」も、一見、地の文のように見えながら、実は、源氏や信吾の心中の眩きそのものにほかならないからである。

いや、もつと正確に言い換えるなら、これはむしろ、地の文であると同時に、また人物の心中の言葉でもあって、こうしたクライマックスに達した時、人物と作者の二つの視点が、ついに一つに合致するのだというべきかもしれない。そして、読者もまたこうした瞬間、深い共感の絆によって、この、作者と人物の合一に誘引され、一体化し、作品世界との融合を経験するのだといえるのではないのだろうか。

サイデンステッカー教授の英訳をつぶさに点検する時、教授が確かにこのような昂揚を感じ、それを、日英語の基本的な発想や構造の相違を乗り越え、英語に可能な表現力の限界に挑んで、再創造しようと努力された跡を、ありありと追体験することができるように見える。翻訳という困難な営為のこの偉大な先達が、これほど真摯な労苦を重ねられたことを思うと、あらためて肅然と襟を正し、今一度、深く御冥福を祈らざるをえない

思いに駆られるのである。

——上智大学名誉教授——

追悼 サイデンステッカー先生

エドワード・サイデンステッカー

——わが友、わが師、文化人

ハルオ・シラネ

(Haruo Shirane)

エドワード・サイデンステッカーを想うとき、私は友人としてのエド、師としてのサイデンステッカー先生、そして文化人であり、批評家であり、翻訳家であるサイデンステッカー氏を思い浮かべる。

私がエドワード・サイデンステッカー氏に初めて会ったのは、ミシガン大学大学院で、先生と学生としてのことであつた。大学院で日本文学を勉強しようと思ったばかりの私は、近代文学を専攻すべきか古典を専攻すべきかまだ迷っていたが、結局最後の最後になって、『源氏物語』の研究がしたかったからミシガン大学大学院で古典文学を勉強することに決めた。ミシガン大学でのエドワード・サイデンステッカー先生のセミナーが、日本以外では唯一、『源氏物語』を徹底的に勉強できる場だったのである。その後私が博士論文ならびに初めての本

『夢の浮橋——源氏物語』の詩学』(一九八七年)を『源氏物語』について書くことができたことを考えると、あの決断には運命的なものを感じる。ミシガンのサイデンステッカー・セミナーでは、日本古典文学大系版の『源氏物語』で原文を読んだ。他の先生方(日本近代文学を教えていたウィリアム・シブリー先生など)までが毎年源氏のセミナーを受講していたので、私は初日からとても感銘を受けた覚えがある。

サイデンステッカー先生のセミナーは、源氏の原文を細部にわたって精読するスタイルで、とても厳しいものだった。また、源氏の原文を翻訳していた長年の経験が、先生が語句を分析される際に如実に現れていた。私がミシガン大学に来て初めての学期に、クノッフ社からサイデンステッカー先生の源氏訳が出版された。先生が

学科の研究室で薄紫色のカバーをした『源氏物語』の翻訳が入った大きな箱を開けたときに私もその場に居合わせていたが、それは本当に興奮の一瞬だった。後日サイデンステッカー先生は、翻訳の出版を記念して、『源氏物語』に関する公開講義をした。私はまた、先生の日本文学史の授業も受講していた。コロンビア大学の学部生だった時に、当時日本文学史の本を執筆中だったドナルド・キーン先生の同様の授業も取ったことがあるが、サイデンステッカー先生の講義はキーン先生とは違って、文学の好き嫌いや優劣をとでもはっきり表されていた。先生は清少納言が嫌いで紫式部は好きだといひ、どうして後者が前者より優れているかに関する長い説明もされたのだった。

ミシガン大学大学院での一学期目の終わりに、サイデンステッカー先生は、ちょうど高名な平安文学の研究者だったアイヴァン・モリス先生が亡くなったばかりのコロンビア大学に転任されることになった。そこで私も先生についてコロンビア大学に戻り、『源氏物語』を引き続き先生のセミナーで勉強した。一九八七年に先生がコロンビア大学から退職されたとき、幸運にも先生のあとを継ぐことになった私は、サイデンステッカー、ドナル

ド・キーン両先生の築かれた偉業を受け継ぐことを常に意識してきた。それでも、両先生の偉業をそのまま再現するのは当然無理なことだった。

周知のように、両先生は欧米における日本文学研究の礎を作られた。近現代文学ならびに古典文学の翻訳、研究の全ての面において、両先生ともに非常に多くのすぐれた仕事を残された。一九六〇年代半ばから八〇年代にかけて北米に育った者にとって、日本文学を両先生と結び付けないことはあり得ないことだった。両先生は、戦後欧米で私たちが日本文学として認識するようになった文学を形作ったのである。また、戦後、両先生は、日本人に日本文学は世界文学の一部となるに値する文学であると強調し、敗戦国である日本に、自国の文学に素晴らしい価値があるという希望をもたらしたのである。

サイデンステッカー氏は二つの面できりわけ大きな影響をもたらした。一つは、川端康成の作品の翻訳をし、川端の日本人として初めてのノーベル文学賞受賞に貢献したこと。もう一つは、『源氏物語』を英訳することにより、源氏を世界中に日本文学の最高傑作として認識させたことである。アーサー・ウェイリーも氏より前に『源氏物語』を翻訳していたが、それは翻訳というより

『源氏物語』をもとにした文学創作あるいはすぐれた翻案で、原文から自由に多くの場面を省略して訳したものであった。ウェイリーはまた、和歌のほとんどを訳しておらず、訳したとしても会話のかたちにしていった。つまり、サイデンステッカー氏の翻訳によって初めて、欧米の人々は『源氏物語』の全貌を知ったのである。和歌の重要性や、その和歌から浮かび上がる自然情景も初めて浮き彫りにされた。ウェイリーは『源氏物語』を、服装や調度品、建築様式等を変更してヴィクトリア朝・エドワード朝の小説へと変えたので、サイデンステッカー氏の翻訳によって初めて私たちは平安時代の宮廷の情景を見たのである。氏の『源氏物語』は、西洋の読者にとって驚くべき新発見であり、欧米における『源氏物語』研究のブームの礎となった。

サイデンステッカー先生は学生であった私への要求が厳しく、一字一句まで気を配って添削され、ある時は私が句読点を正しく使っていないと注意されたこともあった。文章に自信があった私にはこの注意は衝撃的なものだったが、そのおかげで、以来私は一文一文の句読点にまで細心の注意を払うようになった。サイデンステッカー氏は、教師であり大学教授である以上に作家であつ

た。(先生は博士号を持っていないことを大変誇りに思われ、スタンフォード大学、ミシガン大学、コロンビア大学の三校で博士号なしでデニユア(定年までの終身在職権)を取ったのは自分だけだとよく自慢されていた。)私がコロンビア大学博士課程の学生だったときにも、先生は英語で小説を書いている最中だった。商業的には小説家として成功することはなかったけれど、先生は小説家特有の感受性を持ち、言葉の上手な使い方を知っていて、英語の小説、特に十九世紀の諷刺小説や風俗小説についても熟知されていた。サイデンステッカー氏はある意味で何よりも文学作家で、翻訳にしても批評やエッセイにしても、日本語の言語と文学に魅せられつつ、英語で素晴らしい文学作品を残したと言えるのではないだろうか。

サイデンステッカー氏にとって『源氏物語』の最大の魅力は、それが「*novel* (小説)」だったことであつたと私は思う。氏の定義によると、「*novel*」とは現実的な登場人物と情景が描かれた心理的小説を指すが、登場人物の内面を非常に深く複雑な心理描写で表している『源氏物語』はこの定義にぴったり当てはまるのである。しかし一方でサイデンステッカー氏は、『源氏物語』とヨ

ロッパの小説とを、二つの基本的な点において非常に注意深く区別していた。それは、完結性という観念と、自然情景のはたす役割に關してである。川端康成の作品に觸れることでサイデンステッカー氏は、川端作品は完成することはなく常に執筆中の状態にあるのだと悟り、さらに『源氏物語』も同様であると論じた。『源氏物語』に關する優れた論文(講座『源氏物語研究 第十一巻 海外における源氏物語』おうふう、シラネ編所収)の中で氏は、『源氏物語』における自然描写が果たす役割について考察を展開し、紫式部の小説の特長をジェイン・オーステインやディケンズの小説と比べながら明らかにしている。『源氏物語』は、内的心理と外的情景とを結び付ける和歌の働きによって、登場人物の深い心理描写に長けると同時に、非常に精細で象徴的な季節の情景描写を駆使した作品となっていることが、具体的に論究されている。氏の研究者と作家両方の資質が遺憾なく發揮されている鋭い論考である。

サイデンステッカー先生が作家かつ教師として私に教えて下さったことの一つに、すべての文章を最低限に必要な要素まで凝縮するということがある。もし二文でなく一文で言いたいことが言えるなら、そうすべきである。

深い愛情を持っていたが、同時に日本の現代社会、特に日本人の「集団で走る傾向」に対して大変批判的でもあり、現代の流行やファッションを諷刺したり批判したりすることも辞さなかった。

日本に行くたびに、私は上野の彼の自宅の近くでエドに会い、よく一緒に上野公園を散歩したり、彼が大好きだった寄席に行ったりしたものだ。これはサイデンステッカー氏の永井荷風の一面だったと思う。彼の近代日本文学に關する本の中の最高傑作はおそらく、エドが自分自身の下町への愛情、古きよき東京への懐古、そして東京の街の生命力への深い興味を投影して書いた、*Kafu the Scribbler: The Life and Writings of Nagai Kafu, 1879-1959* (1965) だろう。荷風のように、サイデンステッカー氏も東京の裏通りを歩き回り、いっおう変わった下町の人々に出会った *Taneur* (街の遊歩者) だったのだ。そして彼の最期の事故は上野公園で起こった。

荷風のように、サイデンステッカー氏も成人してからの生活をほぼ毎日細かく日記につけていたが、その日記という形は、エッセイとともに、彼の執筆活動にぴったりの媒体だったと言えるだろう。(サイデンステッカー

る、と。私はこれが、彼の翻訳の本質をよく説明していると思う。氏はまずはじめに日本語の原文をほぼ逐語的に訳して、それからその英語の不必要な部分を削除し、どんどん短くしていきながら、英語自体を書き直していった。その結果、とても簡潔でかつ表面的な言葉を越えた余韻が伝わってくる翻訳になった。サイデンステッカー氏は、比較的短い文章を書いた川端康成と、果てしなく長い文章を書いた紫式部の両方ともをこの方法で訳した。ウェイリーはその逆に、英語にすると不十分になってしまうと思われる部分をふくらし、流れるようなヴィクトリア朝的修辭的な文飾を付け加えつつ、翻訳の文章を長くしていく傾向にあった。サイデンステッカー氏の『源氏物語』の翻訳には、ウェイリーの翻訳への反作用だったといえる面もある。

私が博士号をもらった当日、サイデンステッカー先生は、「今日から私をエドと呼んでくれ」と言った。その時から私は氏の学生から友人へと変わったのだ。エドは一緒にいてとても楽しい人で、いつもジョークを言い、あらゆる話題にとっても率直な意見を持っていた。ジャパンタイムズのエッセイストとして長年書かれた作品を読んでも分かるように、エドは日本文化と日本文学に

氏は文学理論を抽象的で不透明だと嫌っていたが、この点においては師と私は姿勢を異にしていた。(サイデンステッカー氏の『源氏物語』評が *Gentle Days* (1977) 『源氏日記』(一九八〇年)としてまとめられているということも意義深い。東京に關する優れた二冊の著作、*Low City, High City: Tokyo from Edo to the Earthquake* (1983) などと *Tokyo Rising: the City since the Great Earthquake* (1990) 『東京下町 山の手 1867-1923』(一九八六年) 『立ちあがる東京・廃墟 復興、そして喧噪の都市へ』(一九九二年)も、彼の東京という街に対する深い愛情と探究のたまものであった。

エドはたいいてタイプライターを使って (Eメールは決して使わなかった) 午前中から午後の早い時間にかけて仕事をし、それからぶらぶら散歩に出かけ、友人と夕食を楽しみ、愉快に酔ったものだった。そうして素晴らしい翻訳や著作を生み、同時に人生をこよなく愉しむことができるエドに、私はいつも驚嘆させられた。もう一緒に歩き回る事はできないが、これからもエドに彼の本の中で出会うことを楽しみにしている。

——コロンビア大学日本文学教授——

(高井詩穂 訳)

國文學²

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇八年 第五三巻 三頁
解釈と教材の研究

特集 早稲田と慶應

- ◆ 対談 早稲田文学×三田文学
- ◆ 森まゆみ 早稲田・町の魅力
- ◆ 大隈重信と福沢諭吉／最後の早慶戦ほか

第二特集

追悼 サイデンス テツカキ 先生

ピーター・ミルワード 安西徹雄 伊井春樹 ハルオ・シラネ

